

めぐみイエス・キリスト教会

2022年11月27日(日) 第四主日礼拝
週報「通算第634号」



2022年標題聖句

第 I テモテへの手紙御6章17節～19節

《高慢にならず、頼りにならない富にではなく、むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませて下さる神に望みを置き、善を行ない、立派な行ないに富み、惜しみなく施し、喜んで分け与え、来たるべき世において立派な土台となるものを自分自身のために蓄え、まことのいのちを得るように命じなさい。》

第一礼拝(教会にて) 毎週日曜日 午前10時～11時

第二礼拝※中止

聖書の学びと祈り会 毎週水曜日 午後6時～(各家庭にて)

牧師 鈴木 竜 実
ますみ

※当教会は、モルモン教、エホバの証人(ものみの塔)、統一教会(原理福音)とは、一切関わりがありません。

◎礼拝プログラム

【前奏祈祷】

【賛美Ⅰ】 新聖歌343 「罪に満てる世界」 p. 546

【交読文】 No.25 詩篇第73篇 p. 899

【賛美Ⅱ】 新聖歌196「祈れ物事」 p. 290

【使徒信条】

【主の祈り】

【先週説教】

【賛美Ⅲ】 オリジナル曲No.1「ひとつのいのち」

【聖書朗読】 使徒の働き21章7節～14節 p. 278下段左側

【礼拝説教】 《第二回目の警告》

【聖餐式】

【賛美Ⅳ】 新聖歌165「栄光イエスにあれ」 p. 235

【平和祈り】

【頌 栄】 新聖歌63 「父・御子・御霊の」 p. 85

【祝祷後奏】

※本日の聖書「使徒の働き21章7節～14節」

21:7 私たちはツロからの航海を終えて、プトレマイスに着いた。その兄弟たちにあいさつをして、彼らのところに一日滞在した。

21:8 翌日そこを出発して、カイサリアに着くと、あの七人の一人である伝道者ピリポの家に行き、そこに滞在した。

21:9 この人には、預言をする未婚の娘が四人いた。

21:10 かなりの期間そこに滞在していると、アガボという名の預言者がユダヤから下って来た。

21:11 彼は私たちのところに来て、パウロの帯を取り、自分の両手と両足を縛って言った。「聖霊がこう言われます。『この帯の持ち主を、ユダヤ人たちはエルサレムでこのように縛り、異邦人の手に渡すこと

になる。』」

21:12 これを聞いて、私たちも土地の人たちもパウロに、エルサレムには上って行かないようにと懇願した。

21:13 すると、パウロは答えた。「あなたがたは、泣いたり私の心をくじいたりして、いったい何をしているのですか。私は主イエスの名のためなら、エルサレムで縛られるだけでなく、死ぬことも覚悟しています。」

21:14 彼が聞き入れようとしないので、私たちは「主のみこころがなりますように」と言って、口をつぐんだ。

●ポイント1.「伝道者ピリポ」とは？

※使徒の働き6章1節～6節「七人の執事の任命」(新約p.243上段左側)

●ポイント2.「預言者アガポ」とは？

※使徒の働き11章28節「アンティオキア教会において」(新約p.257下段)

11:28 その中の一人の名をアガポという人が立って、世界中に大飢饉が起こると御霊によって預言し、それがクラウディウス帝の時に起こった。

※ルカの福音書10章1節「弟子たちの二回目の派遣」(新約p.134上段)

10:1 その後、主は別に七十二人を指名して、ご自分が行くつもりの方々の町や場所に、先に二人ずつ遣わされた。

●ポイント3.「エペソにてパウロに示された聖霊の導き」とは？

※使徒の働き19章21節「エペソのリバイバルの後に」(新約p.274下段)

19:21 これらのことがあった後、パウロは御霊に示され、マケドニアとアカイアを通過してエルサレムに行くことにした。そして、「私はそこに行くから、ローマも見なければならぬ」と言った。

※マタイの福音書26章35節前「三度私を知らない預言」(新約p.57上段)

26:35 ペテロは言った。「たとえ、あなたと一緒に死ななければならぬとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません。」

◎先週の礼拝メッセージ【第一回目の警告】

《ミレトスからパウロ一行は再び船出をしました。船はコスとロドス(ばらの島)、さらにパタラを経てツロ(岩)に無事に入港します。ここで、パウロ一行は、弟子たちを探したとあります。聖霊の導きによって、主にある兄弟たちの家を尋ね、多くの奥義を教えたのではないのでしょうか。

さて、『彼らは御霊に示されて、エルサレムには行かないようにと、繰り返し言った』とあります。これは、紛れもなく聖霊による警告です。

ミレトスにて、パウロはエペソの長老たちに、このように語りました。『「ご覧なさい。私は今、御霊に縛られてエルサレムに行きます。そこで私にどんなことが起こるのか分かりません。ただ、聖霊が証しされるには、どの町でも鎖と苦しみが私に待っているということです。けれども、私が自分の走るべき道のりを走り尽くし、主イエスから受けた任務を全うできるなら、自分の命は少しも惜しいとは思いません。」』と。

おそらく、同じようなことを、ツロの人々にも語ったに違いありません。パウロ自身は、「御霊に縛られてエルサレムに行く」ことを強調していますが、果たして本当にそうであったのでしょうか。御霊の思いと導きは、パウロの思いと願いとに一致していたのでしょうか。パウロは、ツロの人々の言葉を受け入れようとはしませんでした。献金を持参するパウロの思いの中には、「おごり」や「高ぶり」が、全くなかったと言えるのでしょうか。箴言の著者ソロモンはこう述べています。

『人は心に計画を持つ。しかし、舌への答えは主から来る。人の心には多くの思いがある。しかし、主の計画こそが実現する。』と。

私たちは、自分の思いと計画と、神様の思いとご計画が一致しているようで、実は少しずれていたと言うことはないのでしょうか。そんな時には、聖霊は直接示される場合もありますが、時には人を用いることもあります。今回のツロの人々の警告は、まさにそれだったのです。》

お知らせ

※12月の第一主日礼拝は、12月4日(日)です。通常通り、教会において行ないます。2023年1月1日(日)の礼拝はお休みいたします。